

はしがき

政治って聞くだけで、何か、むずかしそう……。このように考える人たちに、政治をみる視点を養ってもらうために、できるだけむずかしい言葉をやさしく説明し、政治学を学ぼううえで必要な用語も厳選するテキストをつくってみた。このテキストの主な読者層は、これから大学で政治学を学ぼうとする学生を想定しているが、いままで、政治に対する知識を十分に得ることなく過ごしてきた社会人や、いまさら、こんなこと誰にきいたらいいのかしら、と思っている人たちにも読んでもらいたい。

たとえば、こんな事実を知っているだろうか。

2013年の参議院選挙では、得票数のうえでは、野党系が投票者の52.1%を獲得し、自民党の得票数は、投票者の42.7%しか獲得しなかった。このように、得票数のうえでは、野党系の方が上回っているにもかかわらず、議席数では、自民が47議席(64.4%)を獲得し、野党系は22議席(30.1%)しか獲得できなかった。なぜ、このような逆転が起きたのだろうか。これは、選挙区制のせいなのであるが、選挙区制をどのように設けるのかも、これまた政治の仕事である。

この参議院選挙以降、想定外のことが起きない限り、当分の間、国政選挙はない。地方議会や、知事選、市長選などの地方選挙で、国政に対する判断も下されることになるだろうが、地方選挙は、あくまでも、自分たちの地域のことを考えて投票するものだから、やはり、国政に影響力を行使するまでの選挙になるとはいえない。その間に、政府・与党はこの国をどのような形に変えていくのだろうか。私たちは、次の選挙が来るのを待つだけで、自分たちの政治に対する意見を表明する機会はないのだろうか。

この本を執筆している間にも、政府・与党は、国会において、特定秘密保護法を強行可決させた。この法案は、国民の「知る権利」を制約するのみならず、何を特定秘密とするのかも秘密とされ、第三者によるチェック機関もない。行政が恣意的に特定秘密を指定することのできる、問題の多い法案を可決させた

国会であった。はじめのうちは、どのような法案かもよくわからなかったが、メディアがこの法案の問題点を報道するたびに、人びとは、反対の声をあげるようになってきた。国会の外では、反対の声をあげ続ける人びとが現れた。こうした状況を、ある自民党議員は、「テロ」と形容し、国民の怒りがさらに高まった。国民の怒りを「テロ」としか表現できないところに、政治家が、国民の意向を聞こうとしない姿を見ることができるのではないだろうか。

朝日新聞社が、2013年12月7日に電話による緊急世論調査を行ったところ、特定秘密保護法の国会での議論が「十分だ」と考える意見は、11%にとどまり、「十分ではない」が76%に達した。賛否についても、賛成が24%、反対が51%となり、法律が成立してもなお反対が多数を占めたという（『朝日新聞』2013年12月8日）。こうした世論調査の意見を、政治の世界に届ける手段はないのだろうか。

これらのできごとは、私たちの生活とは関係のないところで起きているものと考え人もいるかもしれない。しかし、法律は、私たちの生活と密接に関わりをもち、ときに、私たちの行動を制約する。だから、私たちは、法案を審議する国会に国会議員を送り出すに当たっては、慎重に、国会議員の掲げる選挙公約に耳を傾け、自分の意思で選挙に行くべきである。また、選挙が終われば、それで、有権者が政治に関わる機会はないと考えるのもよくない。国民一人ひとりが、政治のなりゆきをみていますよ、というメッセージを発することが、政治をよりよいものとしていく。だから、政治に対する「あきらめ」をもつことなく、あるいは、「むずかしい」といって逃げることなく、政治に対する関心をもち続けなければ、気がついてみると、とんでもない社会状況に陥ってしまった、ということにもなりかねない。

本書のねらいは、本書を読み進めた後には、新聞やテレビのニュースで取りあげられることがらを意識するきっかけとなり、日常生活のなかに、政治の動きが密接に関わっていることを、何となくでも、イメージできるようになることにある。あわせて、どのようなニュースがメディアによって取りあげられ、どのようなニュースがメディアでは十分に取りあげられないのかを考えることも重要である。権力者は、自分たちにとって都合の悪い情報を隠ぺいするから

である。

政治学を学んでいくと、さらに、政治に対する関心や、政治に対する疑問をもつ人も出てくるに違いない。そこで、最後に、この本を踏み台にして、さらに政治学を学ぼうとする人のために読書案内をつけておいた。できることなら、この本を1つのきっかけとして、政治に対する関心をもつことができるようになり、さらにより深く、政治学を学ぼうと思う人たちがでてくることを期待したい。

池尾 靖志